

戒壇とは何か？

～仏教を育て、次代へとつなぐ心臓部～



アスギリヤ大精舎戒壇院

Kandy, Sri Lanka

佛紀二五四八年／平成十八年一月二十日

宗教法人 日本テーラワーダ仏教協会

著作・制作 宗教法人 日本テーラワーダ仏教協会

<http://www.j-theravada.net/>

2549/2006 年 4 月 25 日 PDF 版公開

本ファイルの改変及び無断転載・商業目的の再配布を禁じます。

Namo Tassa Bhagavato Arahato Sammā Sambuddhassa.

阿羅漢であり、正自覚者であり、福運に満ちた世尊に、私は敬礼し奉る。



戒壇とは何か？

戒壇はパーリ語で *sīmā*（シーマー）と言います。結界、境界という意味です。結界の中で出家比丘たちの戒律に関わる儀式が行われるので、*vinaya sīmā*（ヴィナヤ シーマー）とも言われます。月に二回、出家比丘たちは戒律をあらためる法事、*uposatha*（ウポーサタ）を行います。日本語でも布薩として知られるものです。布薩法事は、必ず戒壇のなかで行わなくてはならないのです。したがって、戒壇に *uposatha sīmā*（ウポーサタ シーマー）とも言います。それから *uposatha* というのは、釈尊の時代には修行の日を意味しました。仏教以外の宗教でも、月に四回（新月、満月、上弦・下弦の半月）経済活動を止めて、自分の信仰に適した修行をしたようです。それに見習って仏教の在家信者も、月に四回、俗世間的な生活を一旦やめて、修行に励んできたのです。出家比丘は、論理的には一生修行中なので、修行する日にちを決めることは成り立ちません。その代わりとして月に二回、戒律をあらためる布薩法事が、釈尊によって定められました。戒壇を舞台として行われるさまざまな儀式の中でも、この布薩法事は定期的に行われているものになります。

実際に存在する戒壇というのは、比丘たちが五人以上集まって坐っているくらいの面積を持った土地のことです。しかし、五人がギリギリ集まれるような狭い場所は、戒壇として認定できないのです。その理由はこうです。比丘戒律のなかで、比較的重い十三の戒律が破られた場合、サンガはその破戒比丘に対して、仲間から離れて別住することを命令します。決められた日にちが終わったら、別住を解除して、またサンガの仲間を迎え入れる法事を行うのです。この二つの法事を行うためには、比丘たちは二十人必要になるのです。ですから、戒壇の最小スケールは、二十五人は坐っていただける場所となります。互いに離れず、手を伸ばしたら他の比丘

に触れるくらいの際間だけ空けて坐りますので、それほど大きな土地が必要ということでもないので。ふつうのワンルームマンション一部屋（三十平方メートル）くらいの面積でも十分なのです。

戒壇の条件

釈尊の時代には、比丘たちは財産を持たない生活をしていたので、土地を所有することもなかったのです。当時のインドでは、聖地・行者たちが集う場所などはいたるところにありました。また、豊かな人々や国王は、巨大な土地や公園などを所有していたので、その人々は修行者たちにその土地を自由に使うことを許可していたのです。個人財産ではない、森や空き地などの国有地もたくさんありました。そういった場所に比丘たちは自由にしるしをつけて、自分たちが法事を行う結界（戒壇）として認定したのです。たとえ戒壇認定がなされたとしても、その土地は比丘たちの私有財産にはなりません。戒壇での法事が終わったら比丘たちは自分たちの住むところへ帰ります。二週間たったら、また結界の場所で集まります。それまでのあいだ、戒壇に認定された土地は、もとのように自由に使えるのです。現代風に言えば、どこかの公園にグループで遊びに来て、一角にレジャーシートを敷いて楽しく遊んで、それからまた、シートをたたんで帰るようなものです。遊んでいる間は、シートの中に他人は入らないでしょう。

しかし、仏教が広まると大勢の人々が仏教徒になったので、釈尊と比丘たちのために、土地を布施したり寺を造ったりされることになったのです。その場合も、信者さんに布施された土地や建物は、比丘たちの個人財産ではなく、サンガという出家組織全体の共有財産になります。そのような土地に戒壇を認定して、年中法事を行えるようにと、常設の建物なども造られるようになったのです。タイ・ミャンマー・スリランカなどの伝統的な寺を見ると、どこでも境内の一角を戒壇として認定しているのです。

戒壇に認定される場所は、比丘たちに集まりやすい場所でなければ困ります。（交通の便のことです。）商店街や風俗街・賭博場（カジノ）などのそ

ばに戒壇を認定してはいけない。(比丘たちの心が汚れる恐れがある。そういう場所で遊んでいる人々の邪魔になる。) 許可さえ出してくれるならば、在家の方々の土地でも宜しい。しかし、持ち主がいなくなって、相続する人々が比丘たちの立ち入りを禁止したならば、戒壇は使えなくなるのです。



なぜ必要なのか？

出家比丘は俗世間を離れた存在です。しかし、出家によって自由奔放の身になるわけではありません。ブッダの教えを守り、実践しなくてはいけないのです。釈尊に説かれた戒律を守らなくてはならないのです。比丘たちはサンガという組織の一員になるのです。サンガとは、比丘たちみんなを示す固有名詞です。戒律的には、比丘が四人そろったらはじめて、saṅgha(サンガ)なのです。三人だけ集まるなら、gana(ガナ グループの意味)といいます。二人以下は個人です。

出家比丘の生活習慣の管理、寺などの財産の管理、人間同士として(比丘同士、あるいは比丘と在家、どちらでも)でトラブルなどが起きた場合に調停を行うこと、比丘たちに戒律に対する疑問が生じた場合の解決、個人個人の戒律をあらためること、在家を比丘として出家させること、仏弟子としてふさわしくない生き方をする比丘たちを追放すること、などのさまざまな義務は、サンガが行うのです。個人の比丘に対してサンガは絶対的な権限・権利を持っていますが、比丘一人ひとりもサンガの一員なのです。サンガの決まりのすべては、満場一致で行わなくてはならない。要するに、サンガとは理想的な民主主義の組織なのです。

在家世界と離れた無欲・無執着の組織なので、サンガの儀式・義務・儀礼などは自分たちの仲間だけで行うようにと定められてあります。他宗教の人や、在家信徒は、サンガの法事に参加できないのです。国会などの議院運営委員会のようなものです。

一見、排他的に見えるかもしれませんが、決して排他的な思考ではありません

ません。たとえば、ある比丘が夜に食事をしたとします。サンガは戒律違反としてそれを戒めます。その会議にもし一般人が入っていたならばどうなるのでしょうか。「夜ご飯を食べたくらいで何が悪いんですか？ 人をいじめないで、慈しみを実践しなさいよ」と、在家の人に言われるとサンガが困るのです。それは出家比丘の戒律・決まりだから、守れなかった人は懺悔しなくてはならないのです。あちらこちらから反対意見が飛び交うと、満場一致で決断できないのです。また、比丘も、自分に味方がいるのだと、調子に乗って傲慢になる可能性もあるのです。それなら、悟りなどは雲のうえの話になるのです。もしかすると、他宗教の人々の味方に回してサンガを困らせる恐れもあるのです。ブッダも、「同じ価値観、同じ目標を持って歩んでいる人々は、お互い仲良く穏やかにいられるのだ」と仰っているのです。サンガは皆同じ価値観、同じ目標を持っている組織なので、その組織のなかの管理に対して、部外者が入ることはできないのです。



戒壇の重要性

ブッダの教えは、人類にはじめて現れた世界宗教なのです。世界ではキリスト教イスラム教などの世界宗教もありますが、それは政治的・軍事的力によって世界に広げられた宗教です。教理的に見ても、その起源を見ても、民族宗教なのです。ブッダによって説かれた真理は、はじめから梵天・神々・人類を含むすべての生命に当てはまる教えとして輝いているのです。正直に本音を言うと、いまだにブッダの教え（仏教）こそが唯一の世界宗教なのです。武器を持たず、暴力を振るわず、脅さず、徹底した慈しみに基づいて、二千五百年の間、伝えられてきたのです。人類に平和な生き方を教えてきたのです。世界に類を見ない素晴らしい仏教文化も築いたのです。何の権力も財力も持たない仏弟子たちは、いままで行ってきた行為の結果は奇跡と称するしかないのです。否、これは奇跡ではありません。釈尊の教えこそが真理そのものでしたので、激しく変動する時代を生き抜くことができたのです。

仏教伝道史のなかで、出家の役割は絶対的なものです。出家がいなければ

ば、中国にも日本にも仏教を伝えることは不可能だったのです。現代の時代では学者の研究によって、西洋でも知識的にはブッダのことが知られていますが、実際にブッダの教えを実践させて西洋世界でも活かしているのは、出家の精進による結果なのです。科学が発展しても、社会は将来的にどのように変わっても、ブッダによって説かれた真理は、変わることはありません。いかなる時代の人にも、心の安らぎを与えること、生きる道を示すことは、仏教にできるのです。しかし、在家仏教徒には、この重大な義務を担うことは難しいのです。在家は仏教より先に自分の身を守ること、家族を守ることを大事にしなくてはならないのです。暇があったら、仏教も教えるかもしれませんが、それだけでは足りません。出家はブッダの教えのために一生をかけているのです。出家がいることは、仏教が生きていることを意味します。仏教が生きていることは、人類に平和と安らぎがあることを意味します。

この出家の命が、サンガによって守られるのです。次の世代の出家を作ること、サンガにしかできないのです。勝手に僧の服を着ても、出家にはなりません。戒壇というのは、出家が産声をあげる場所です。戒律のいくつかを破ったら、その比丘が精神的に微妙に弱くなるのです。それを修復して健康を取り戻させてくれる場所も、戒壇なので、比丘たちの病院でもあります。出家世界の国会議事堂も戒壇なのです。たかが小さな土地に過ぎない戒壇ですが、釈迦牟尼如来の聖なる教えを生かす、伝える、維持する場所なのです。文学的に表現するならば、「仏教の心臓」といえるところです。



戒壇は「功德の泉」

アショーカ帝王（治世：紀元前 268-232）がはじめて仏教の伝道師をインド以外の九つの国々に派遣しました。スリランカ島は、この九つの一つです。仏教が伝来されて間もなく、スリランカの当時の王、Devānaṃ-piyatissa（デーヴァナンピヤティッサ）が必死に戒壇設定をしたのです。伝道師マヒンダ大阿羅漢の導きにより、戒壇を設定したならば、自分の国に釈尊の教

えが根付くことになると理解していたからです。ブッダの教えが根付くと、その功德によりその国が長らく守られるのだと信じていたのです。政治的な不安、天災、ヨーロッパ人の侵略、他宗教の攻撃、などなど様々な波がスリランカ島に襲い掛かりましたが、いまだに仏教の国として安定しているのです。巨大なイギリス帝国にも、日本の北海道より小さいこの島を抑えることはできなかったのです。代わりに、侵略者であった彼らが、スリランカの比丘たちから真理・道徳を学ぶ羽目になったのです。仏教が根付くと、その国と国民が長らく平和でいられるということは、確かな事実です。

ブッダの教えの法力は、計り知れないものです。もしある国に戒壇を設定することになって、サンガが集まってその儀式を行うとき、天界の神々がその法要に参加して、徳を積むために降臨するのです。それから、比丘たちが行き続けてその場所で法事を行うならば、神々の御加護は絶えないのです。戒壇のための土地を寄進する機会を得た人は、仏教で説かれている最高位の徳を積むチャンスに恵まれます。その功德主の親族・血縁者の皆に、賛同者に、この上のない徳が流れていくので、期待してもしなくても、災難に遭遇することなく、衰えない繁栄を喜んで平和で安穏で生きていられるのです。死後、天界に生まれることは確実なのです。寄進することは一回の行為ですが、その場所でサンガがあらゆる法事を引き続き行うので、そのたびに寄進者にも功德を回向するのです。しいて言えば、その戒壇のある地方で仏教が生き続ける限り、徳が増えるものです。いろいろと制限がありまして、寄進することができなくても、土地を貸すことも徳は同じなのです。

サンガに認定された戒壇がある国は、敵に攻撃されません。平和を保ちます。国民は繁栄するのです。仏教の心臓部をつくることになるので、戒壇がある場所は、本格的な聖地になるのです。



日本仏教とテラワダ仏教

テラワダ仏教という名前は、法人として登録していますが、決して

既存仏教に対抗して活動する目的ではありません。何か名前がないと、登録できないだけです。仏教のすべての宗派の教えの元になったのは、釈迦牟尼仏陀の教えであることは、れっきとした事実です。各宗派の教えは、それぞれ互いに違いますが、基本的に仏教としてどこかで繋がっているはずなのです。自宗の教えだけに凝り固まると、自然に他宗派の違うところばかりあげつらうことになるのは、避けられないのです。大乘仏教は優れている、テーラワーダは劣っている、などと事実を調べることもなく感情的に言いふらしても、知識社会にはあまり意味のないことです。この世で一部が優れている、一部が劣っているという考え自体が恥じるべき思考なのです。我々は仲良く平和的で互いに協力し合って、互いの長所を学んで短所を直して生きる道を選ばなくてはならないのです。それこそ胸を張って世界に向けて「我々は仏教徒である」と自慢できる態度なのです。この世で完全たる善い人も、完全たる悪い人もいるわけではありません。完全たる思考・哲学・生き方を持っている人間組織もいるはずがないのです。一切は不完全なこの世で、我々は互いに協力し合い、補い合い、共存しなくてははいけないのです。

その目的に達するために、どうすればよろしいでしょうか。答えは簡単です。釈迦牟尼仏陀が普遍的な真理を語ったのです。太陽が地球を照らすごとく、ブッダの教えはすべての生命に生きるべき正しい道を示しているのです。ブッダの教えは、テーラワーダ仏教徒の特権でも、大乘仏教の諸宗派の特権でもないのです。インド人文化の教えでもないのです。ある民族に特定の教えでもないのです。真理・事実そのものなのです。ということは、人類の知識人の共有財産なのです。

日本テーラワーダ仏教協会は民族性、時代の流れ、文化や言語の違いを乗り越えた、ブッダご自身の純粋な教えを皆仲良く学んで実践してみようではないか、という活動を目的にしているのです。ブッダの教えでは、「私の教えを信仰しなさい」ということではないのです。人間には文化があり、生き方があるのです。強引にそれを変えてイスラム教のように鋳型にはめることはないのです。宗教・宗派はどう変わっても、無宗教であっても、ブッ

ダから学ぶべきものは確実にあるのです。我々は自分たちの文化やしきたり・習慣などはそのまま大事に守りつつ、次の世代にも伝えつつ、人間として正しい生き方は何なのか、善悪の判断はどうするのか、どのように生きれば宜しいのか、どんな人間になれば宜しいのか、次から次へと現れる疑問は、どのように解説するのか、といった答えは、いとも簡単に釈尊から学べます。

というわけで、日本テーラワーダ仏教協会は日本の既存仏教の僧侶・先生方と友好関係を持ち、一緒になって現代日本の社会に精神的なやすらぎを与えるという大役をどのように果たすのかと試行錯誤して考えたり悩んだりしているところです。



協会会員の願い

ブッダの教えの論理性に、科学性に、感動を覚えた方々です。自分の悩みに対する回答をたちまち与えられて、驚きを覚えた若者もいるのです。現代社会に起きてくる様々な問題に、ブッダが見事な解決策を持っていることに、驚きを覚えた方々もいるのです。その上、ブッダの教えを実践してみようと、まじめに挑戦して見事な手ごたえを感じている人々も少なくはありません。

それで会員の方々が考えたのは、日本の既存仏教にもより明るく活動できるようにと力を与えることができる、途方にくれる若者たちにしっかりした生き方を示す、実践により確実に心の安らぎを体験できる、この教えを日本に根付かせなければ、東洋の大国としては示しが見つからないということです。その考え方に押されて、出家を希望する方々も徐々に増えているのです。

次の問題です。出家するならば半端な気持ちで、面白半分でも、かえって迷惑です。やるならば、釈尊に説かれたように純粹に戒律を守って修行したほうが日本の社会に信頼されます。そうでないと、変わり者だ、

という変人扱いをされるだけです。ブッダの教えが変人扱いされることほど、人類にとって不幸なことはありません。したがって、戒壇という仏教の心臓部に当たる場所をサンガによって認定してもらうことは必須条件なのです。必要だと思って、悩んだり落ち込んだりしても、日本テラワダ仏教協会には大金を出して土地を買うほどの財力はありません。信者さんもいません。一般人で構成されている貧乏な組織です。しかし、純粋な気持ちだけは本気です。強引にお布施を集めることもブッダの教えに逆らうことになるのです。

日本のお寺がもし慈悲を持って、また国際的な仏教交流を重んじて、少々土地を貸してくださるならば、それこそ誰にも迷惑をかけないでブッダの教えを実践することができるのではないかと思います。お寺の土地なら、寄付するという考えもいらないのです。お寺の土地は、一般の人々の土地と違って、安易に売買されたりする心配もありません。面白おかしく言うならば、御住職が仏教をやめない限りは安全です。真剣に言うならば、仏教徒の交流・友好関係に対しては、この上のないチャンスです。なぜならば、テラワダ仏教は文化的に言うと個人宗教ではありません。タイでは国家宗教です。ミャンマーでもスリランカでも、事実上の国教になっています。日本では政教分離というアメリカ人の考え方に乗せられて、歴史のある日本の仏教を社会の表舞台から排除しています。この際、テラワダ仏教と友好関係を結べば、たちまち国際仏教になってしまうのです。

現代は競争して生き延びることはできないのです。たとえ宗教であっても、そうです。はじめから平和と平等と共存を説かれたブッダに学んで、最低限、仏教徒だけでも共存主義を実践したほうが、社会に対する模範になるのではないかと思います。



戒壇認定とその条件

サンガによって戒壇を認定したら、またサンガが集まってその認定を解除しない限り、有効なのです。時代が経つと、ある場所で戒壇認定をしてあつ

ても、後の人々はまったくなることもあります。土地を売買されたり、建築物が建てられたりして、戒壇に認定した場所がわからなくなることもあります。しかし、認定された戒壇がそれで無効になるわけではありません。

仏教の国々では、新しい土地で戒壇を認定する法事を行うとき、まず戒壇の解除法事を行うのです。なぜならば、遠い昔その辺に戒壇があった可能性もあるからです。古い戒壇の一部でもまたがった土地を新しい戒壇として認定しても、その法事は無効になります。ですからまず、戒壇認定する面積の外側一尺程度の土地を対象として、戒壇の解除法事を行うのです。それから、戒壇認定する土地の四隅に目印の結界石を埋め、比丘サンガによる法事を行い戒壇として認定するのです。

戒壇になった土地は、月二回の布薩法要などサンガの法事を行うときは、他の建物・樹木などに接してはなりません。もし戒壇の土地に法堂のような建物があって、そのなかで法事を行うときも、その建物を他のものと接触しないようにしなくてはならないのです。たとえば電力線・電話線などがあつたら、一時的に外すのです。というわけで、ビルの一角のような場所は、戒壇として認定することはできません。

現代的に見ればややこしくつまらない決まりではないかと思ってしまう可能性もあります。しかし釈尊の時代から現代まで、この決まりなどはとても簡単に守ることができたのです。電話・電気・水道・集合住宅の文化は、最近できたものです。最近の文化に合わせて戒律を変えたらいかがでしょうか？ それは正覚者たるブツダの智慧より、欲に競争におぼれている現代人の考え方を大事にするべき、優先するべき、という話になります。釈尊の時代では、戒律の不便なところが現れた場合は、それを釈尊に報告します。釈尊がそれに対する解決法を教えてくださいます。テーラワダ仏教では、戒律を変える権限は釈尊にしかない決められているのです。ですから、たまたま不便なところもありますが、テーラワダ仏教では釈尊の智慧と慈悲を尊重して、決して戒律・規則などを変えようとはしないのです。

これは頑固な態度でも保守的な態度でもありません。釈尊が解脱への道を知り尽くしていたのだから、人が何を行い何を行うべきではないか、ということは、明確に知っているのです。解脱する目的で出家したものは、悟りを開いていない凡夫なのです。また、修行も完成していないのです。そのような人々には、戒律を改革したり新しい修行方法を提案したりする能力も資格もないのです。これから勉強しようと入学する学生が、自分で教科書を書いたり教育方法を定めたりすることはできないのです。ブッダは人々に自由を与えていたのですが、ブッダの教えを好き勝手に変えると二十年から五十年の間で元の教えは跡形もなく消えてしまうのです。それから、何かを変える、改良するということは、その何かに短所があると発見したときに成り立つことです。悪いものは改良するのであって、善いものはそのまま守るのです。では、釈尊の教えに見出せる短所は何でしょうか？釈尊自身が、自分が説いた教えを「そうではない」と否定することは人間にも神々にも梵天にも他のいかなる生命にもできない、と説かれています。この大胆な挑戦を覆すことのできた存在は、歴史上、誰一人としていないのです。戒律と規則の場合は、テーラワーダの比丘たちも実行する上でいろいろ不便なところもあることは誰よりも知っているのです。しかし、釈尊の智慧を軽んじて戒律・規則を変えようとはしないのです。

不完全な人間には、ブッダによって説かれた戒律と規則をそのまま完璧に守ることはお釈迦様在世の時代でもできなかったのです。しかし皆、完璧に守ろうという気持ちで挑戦だけはしたのです。それが大事なポイントです。ですからいろいろと些細な戒律が壊れてしまうのです。それで月に二回、戒壇という結界の中で集まって、戒律をあらためることが釈尊によって定められたのです。月二回の布薩法事なしに、比丘サンガが存続することはできません。



戒壇で行う法事

1) 比丘たちの月二回の布薩法事

- 2) 比丘として出家を誓願する沙弥（見習い僧）を一人前の比丘としてサンガにより認定する法事（この場合のみ、志願者が比丘ではないので、戒壇の中に比丘でない一般の人々も入って見学することができるのです）。
- 3) 比丘がもし何かの問題を起こし、サンガがその審判を行うときの裁判所として。
- 4) 三ヶ月間の雨安居を終了する法事。
- 5) 雨安居の修行を完了した比丘たちに、在家信者が衣一着を布施する習慣があります。その衣をひとりの比丘に与える法事（カティナ衣法事）。毎年一回行われます。
- 6) 世界中のテーラワーダ比丘に関わる新しい決まりなどはサンガによって定められなければならないのです。その法事も戒壇で行われます。このような法事は仏教史上、二、三回しかなかったのです。



布薩法事の式次第

では月に二回、比丘たちが戒壇の中に集まって何をやるのかと、興味が湧くことと思います。ある特定のグループが自分たちだけに関係する話し合いなどを行う場合は、それは外の人・関係のない人に報告することはありません。会社で行う会議のようなものだとして理解すればよいのです。要するに布薩法事の式次第は、比丘ではない人に言わないのは伝統的な決まりなのです。そのような決まりがあっても、仏典はすべて出版されているし、日本訳も英訳もあるし、また比丘たちの勉強のために作られたテキストも出版されているし、読めば誰にでも理解できることですから、この秘密主義もそれほど意味を持つものではありません。結局は仏教には何の秘密もないのです。ただ出家比丘たちは偉大なる釈迦牟尼仏陀の弟子として、聖者への道を歩む同志としての意志を確認するだけのことです。

- 1) まずどなたか戒壇の場所を掃除して、坐れるように席を用意をします。暗いならば、明かりを立てます。それから、必ず足を洗う水と飲み水という二つを用意します（これは釈尊時代からの習慣です）。

- 2) 集まる時間に比丘たちが戒壇に揃います。
- 3) 一人ひとりの比丘が懺悔の儀式を行います。それは個人対個人で、行うのです。懺悔を終えていないと、布薩法事に参加することはできません。布薩法事自体は、懺悔の法事なのですが、もし懺悔を終えていない比丘たちがいる場合は、布薩法事を行うとき、戒律項目を唱えるたびに、法事をいったん止めて、その戒律項目を懺悔してあらためなくてはいけないことになるのです。そうなると、法事はいっこうに終わらない羽目になるのです。また個人の比丘にも、この戒律項目を自分で破ったか否かとはっきりしない時もあります。この問題は、簡単に解決しています。法事を行う前に、個人対個人で、一切の戒律・規則に対して包括的に懺悔をするのです。
- 4) すべての比丘たちが揃ったならば、もし戒壇の建物で法事を行うならば、サンガの決定を経て、一人の比丘がドアを閉めます。それからは、遅刻した比丘にさえも、戒壇への立ち入りは禁止です。
- 5) 比丘たちは互いに身体が触れない程度につめて坐ります。そのなかから、戒律・しきたりに詳しい二人の比丘を選びます。決まりでは、年上の長老と、もう一人になりますが、長老があまりにもお歳で弱い方であるならば、他の二人を選びます。一人がのち、議長役をやります。一人が法事を行うために必要な戒律の条件が揃っているか否かと尋問します。
- 6) 尋問役の比丘は、長老より年下の人であるならばサンガに礼をしてから、尋問に答える比丘の前に坐り、尋問するのです。尋問は二種類です。一つは法事前の準備に対する尋問です（水、灯りなどを用意しているか、など）。二つ目は法事を行うために必要な条件です（比丘の人数、日にち、布薩法事の名目—いくつか種類がある布薩法事のうちのどの布薩法事を行うのか—、病気・遠距離などの理由で参加できない比丘たちの委任を取ったか否か、などです）。儀式のときは、すべての尋問に「はい」と答えるように前もって準備しておくのは普通です。そのほうが速やかに事を運べるのです。
- 7) 尋問比丘は、「布薩法事を行うために必要な二種類の条件が完成してはわかりました。布薩法事を行い、pātimokkha（パーティモッカ）を読み上げることをお願いいたします」と報告します。
- 8) 尋問に答えた比丘が、目上の長老がいるならば礼をして許しを貰い、議長席に座り、

pātimokkha (パーティモッカ) を読み上げます。pātimokkha (パーティモッカ) の戒律はカテゴリーに分けられているので、ひとつのカテゴリーが終わったら、比丘たちにそれを大事に守ること、この戒律セットを犯していないことを伺って、賛成を取るのです。それから次のセットを読み上げるのです。すべての比丘たちが満場一致で賛成できるよう事前の準備をしますので、滞りなく pātimokkha (パーティモッカ) を読み上げることができるのです。

9) 早口の比丘なら早く終わりますが、ゆっくり唱える比丘なら一時間くらいかかるのです。比丘たちの便利も考えて、早く帰らなくてはいけない比丘もいる場合は、省略バージョンも認められているのです。省略バージョンとは、pātimokkha (パーティモッカ) の 1, 2, 3 のセットぐらいを読み上げて、残りはセットの名前だけで終了することです。道場で行う布薩法事では、時間の問題はないので、省略バージョンは使いません。町や村にある戒壇で集まる比丘たちは、ほとんど省略バージョンにするのです。

10) 法事が終わったら、神々、協力してくれた信者の方々、またすべての生命にその功德を回向して、みなを幸福を誓願するのです。これで終了です。

布薩法事は完全にパーリ語で行うので、パーリ語がわからない人にとっては何をやっているのかさっぱり理解できない可能性もあります。しかし比丘たるものは布薩法事に必要な經典項目を学ぶことは必須条件です。いったん比丘になったら、五年間見習い期間があるのです。その間で必要なものを理解し暗記しておくならば、見習い条件を解除するのです。仏教のことをまったく知らない第三者の方が、外から観察すると、この法事はどのように見えるのでしょうか？ ただ比丘たち何人かが集まってお経を上げているのではないかと、いうふうには見えません。長くても一時間半で終わる法事なのです。しかし、サンガの存続において、仏教の存続において、この上ない大事な尊い法事なのです。(了)

**Ettāvatā ca amhehi sambhataṃ puñña sampadāṃ
sabbe sattā anumodantu sabba sampatti siddhiyā.**

ここまで我々が積みし全ての功德なる財宝を、一切衆生が随喜してお受け下さいますように。
遍く一切の衆生が福德に満たされますように。